

戦後日本の住宅デザインの歴史的变化について 1951年から1955年までのデザイン思潮

Historical Change of House Design Postwar Japan Design Thought from 1951 to 1955

小泉 幸男*
Yukio Koizumi

I 序

1950年代に入ると前期5年間の特徴であった政治的な色彩の強い運動は急速に減衰して行った。進歩的な建築家の統一組織として誕生し活発に活動していたNAU（新日本建築家集団）が運動方針をめぐって足並みが乱れ遂に1951年6月17日の第5回総会を最後にして自然消滅して行ったことがこの状況を象徴的に表はしている。

一方住宅の建設はどうだったか。この5年間は前の5年間に比べて建設量は決して増加してはいない。むしろ減少している。特に一応のピークに達した1948年に比べて1951年は建設量が半分以下になっているのである。しかし注目されるのは建築家がデザインした作品としての住宅は急速にふえていることである。新建築誌に作品として発表された住宅の数は1946年から1950年までの5年間にはわずかに32件に過ぎなかったのが1951年から1955年までの5年間には181件というふえ方である。

問題は作品の傾向である。今この時期の作品をつぶさに見直してみると早くも非常に多様化していることに驚かされる。勿論主流をなしているのは前の時期に引続いて我が国の国民大衆

のための新しい住居デザインを追究しようとする進歩的なものである。この方向が社会的要請に沿ったものであるという状況も変りがなかった。しかし同時に一方でこの流れから外れた作品が早くも登場して来ている。その一つはブルジョア住宅である。これらのものは外国人のためのものが多く一応近代的なデザインになってはいるが注文主主導でデザインの追究も不徹底であり国民大衆のための住居デザインの追究には何等役に立たないものであった。もう一つは早くも和風住宅が登場して来ていることである。これらの多くは日本人の新しい住生活のあり方を追究した上でのものではなく伝統的な様式を無批判に踏襲したに過ぎないもので設計者の名人芸でデザインとしての完成度は高いものが多かったが、新しい住居デザインを求める社会的要請には全く背を向けたものであった。

これらのものを除外して主流となった作品についてみるとデザインの傾向としては前の5年間に引続いてやはり機能主義デザインである。しかしそれがこの5年間に徐々に変化を見せ始める。今から見るとこの5年間は戦後の住居デザインの転回点になったように思えるのである。以下にまとめたものはこの点に的をしぼってこの時期のデザイン思潮を解明しようとしたものである。

II 主な主張とそれに対する筆者の見解

1. 機能主義の歴史的意義について

機能主義については前稿の中でもふれたところであるが非常に重要な問題であり又前稿では十分言いつくせていない感もあるので再度ふれておきたい。

先ず第一に言わねばならぬことは機能主義は近代工業と機械文明のイデオロギーだということである。近代社会を生み出したのが近代工業であることは明らかである。そして近代工業を推進した人達それは工業ブルジョアジーであったがこれらの人達が強力な武器として用いたのが機械であった。工作機械に始まった自動車や飛行機に至る機械は近代工業を推進する人達にとっては正に世の中を変える救世主のような存在であったに違いない。本来機械の設計には徹底した合理性が求められる。少しでも能率的に製品を作れる機械少しでも早く人や物を運べる自動車や飛行機そこには前近代的な様式や装飾の入り込む余地はない。機械の設計には実用的な機能を追究する機能主義は自明の理であった。

しかし住居については少し事情が違っていた。近代になって生れた機械と違って住居には前近代の長い歴史がある。近代化はそう簡単なものではなかった。しかしコルビュジェやグロピウスのように建築の近代化を推進した人達は何とか住居を近代化したかった。住宅を機械の仲間に入れ工業生産化したかった。そうすることが人類にとって幸福をもたらすという確信もあった。「住宅は住むための機械である。」というコルビュジェの言葉はこの気持ちをよく表している。このようにして機能主義が住居デザインの新しいイデオロギーとして登場したのであった。

2. 戦後の日本の機能主義デザインについて

戦後日本の住居デザインに機能主義が主流となったのは何故だったか。それは次の理由による。

第1には当時の極端に貧しい状況の中で住宅を作るには当然のことながら少しの無駄も許されなかった。このような条件の下でもっぱら実用性を追究する機能主義デザインが至上命令的に採用されたのであった。

第2にそれまでの日本の住居には封建時代の名残りがしみついていてそれを排除して住生活を近代化することが社会的要請となっていた状況で近代化の旗手である機能主義デザインはぴったりだった。

第3に機能主義デザインは重要なテーマとして工業生産化を目指す方向があったのであるが、戦後日本のぼう大な住宅不足に対して早急に大量の住宅を生産しなければならない条件の下で工業生産化の方向も当然のこととして受け入れられたのであった。

第4に機能主義デザインには工業生産化を目指すために当然ながら一般解を求めようとする性質があったが、これも戦後の日本で新しい住居のモデルを求めることに情熱を燃やしていた若い建築家達の意識に一致するものであった。

このようにして機能主義デザインが戦後日本の住居デザインの主流になったのは当然のことであったと言える。しかしそれがこの時期になってかげりを見せ始めたのは何故だったか。今これをふり返ってみると次のようなことが浮かび上がってくるのである。

先ず第1には戦前の封建的な暗い生活の思い出に対する反動や自分達のみじめな生活に対してあまりにも違う欧米の豊かな生活へのあこがれが日本人に将来の生活がどうあるべきかを深く考える余裕を与えずひたすら観念的に

近代的生活＝欧米式の生活

という考え方に駆け立てて行った。一般解を求める方向は当時の状況では決して間違っていないがあまりにも単純に欧米式の生活をモデルにしてしまった。

第2に合理的なデザインを追究するためには住生活を深く分析することが不可欠であったが、このことが実際には容易でないということもあって一部の建築家を除いてこれに十分な努力が行

われたとは言えず、又十分な成果もあがらなかった。まだまだ貧しい生活が続いていた当時の我が国で合理性を追究する機能主義デザインの存在意義は決して低下してはいなかったのであるがその多くは不徹底なものに終わってしまった。そして不徹底なままで踏襲されて行ったために機能主義デザインそのものが様式化し陳腐なものになって行く兆しが出て来たのであった。工業生産化がはかばかしく進まなかったことも暗い材料になった。このような傾向に対して真剣にデザインの方向を模索していた建築家達はどのように考えていたのだろうか。

3. 池辺陽氏の主張について

機能主義デザインに疑いを持たずにまっしぐらに進もうという考え方の人達もあった。その代表が池辺氏である。池辺氏は従来から住宅デザインを科学的に追究することを強く主張してきた。これは氏の作品、住宅No14, No15を紹介した文章の中の次の言葉によく表されている。

「私たちの住居追究の方法は感覚的なものを一応拒否することを出発点を求めている。それには第1に現在の住居水準上昇のためには構造の安全性、設備の充実等に費用を割り出さなければならず、感覚の問題はそれらの上に確立されなければならないと考えるからである。第2に感覚を先にすることはややもすると分析的方法を鈍らせ常識的な、今までにでき上った形に引張られがちであり、真に新たな形を生み出すことを阻害すると考える。」⁽¹⁾

前稿でもふれたように池辺氏も機能と共に造形についても十分関心を持っておりこの二つは最終的には統一されなければならないものと考えていたのであるが、「現在の日本の住居の段階は完全なすぐれた、古典的とも云うべき作品の生れる時期ではない。」⁽²⁾と考えていたのである。池辺氏にとっては住居デザインの科学研究はライフワークであり1作1作はそのための実験であった。同氏が作品を固有名詞で呼ばずNoで表しているのはこの考え方をよく表しているのである。

(なほ池辺氏は1954年10月に出版された婦人向けの本「すまい」の中で住居には生活機能、空間機能、構成機能、視角機能の四つがあるとして造形を住む人に対する働きの面からとらえて一つの機能とする新しい表現を用いているが、上記の池辺氏の基本的な考え方は変っていない)

その池辺氏にとって機能主義デザインのかげりは気になるところであった。しかしその原因は機能主義デザインの方向が間違っているのではなく前提として当然なされなければならない科学的な分析がその困難性もあって十分なされていないことにあると考えた。池辺氏はこの困難な仕事に敢然と立ち向かおうとしたのである。

この池辺氏の努力は1953年1月の新建築誌に発表された「図式による住宅組織の分析」という論文に結晶している。ここで池辺氏は先ず多岐にわたる住行為を相互の関連から組織としてとらえ組織として分析することを試みたのであった。従来住行為の分析はかなり多くの建築家や研究者によって行われていたが相互の関連を組織としてとらえることには不十分であった。池辺氏はここに着目したのである。そして更にこれを図式によって分析しようとした点に特色がある。池辺氏の考えは次の言葉によく表はされている。

「現代建築において組織はその構成を決定する基礎である。様式時代の建築の形が左右相象等の美学的比例関係や、習慣的ブロック配置によって決定され、又はその一部（神社計画における本殿はその一番はっきりしたものである）への従属関係で決定されていたのに対し、現代の建築の基礎はその建物の内容、組織であり、形はこれを基礎として導き出される。このことは今更云うまでもないことであるが、実際の建築設計の過程ではしばしば混乱しがちであり、現在つくられる建物がすべてこの組織を基礎としているとは考えられないので、ここに再びくりかえしたまでである。

しかしこのような間違いは工場などの建築には一番起りがたく、会館建築、住宅建築などの人間を対象とする建築によく起りがちである。

一つにはこれらの建築が人間の心理的なものに触れるのでどうしても過去の形に捉われやすいことが大きな原因であるが、更に組織を基礎として計画を進めようとしてもその把握が現代の科学の程度では根底まで把握できない部分が多いからでもある。」⁽³⁾

池辺氏はこの中で住行為を分析するに当って社会性、個人性、労働性の三つの要素から分析することとした。多種に亘る住行為を三つの要素のそれぞれの量をしらべて三角座標に図示したのである。図1 そしてこれを元にして寝室、台所、居間を頂点とした三角形を画きそれぞれに關係する便所、洗面を中心にして基本組織図を作った。図2 しかし実際のプランはもっと多様であるので、これを7種類の形に表した。図3

池辺氏はこれを元にして複雑な住組織を分析して行った。その詳しい内容は省略せざるを得ないが、この研究は非常な労作であり又池辺氏はこの成果をその後の作品の上で実践して行ったのであった。

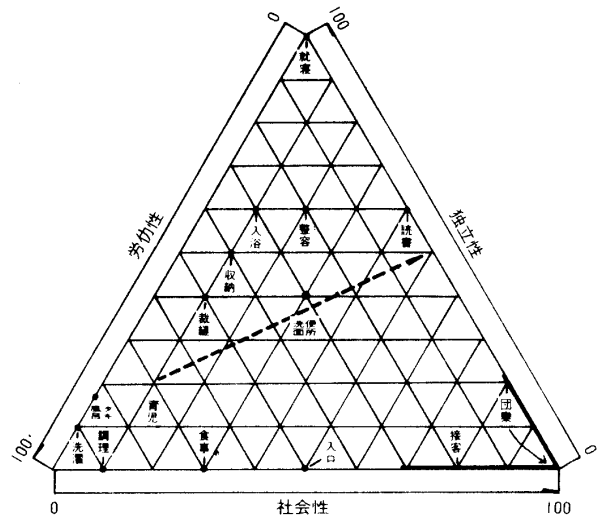


図1

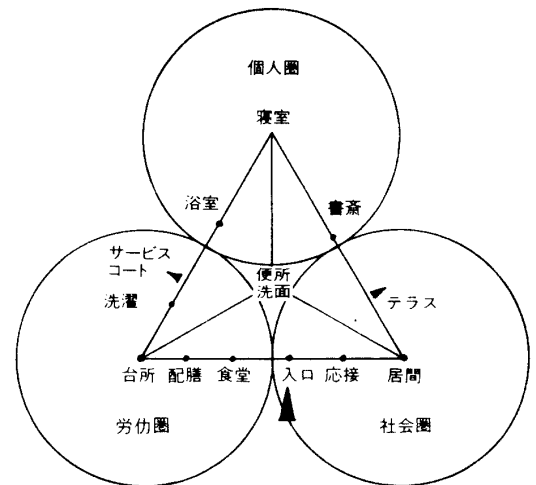


図2

筆者は今池辺氏のこの業績をふり返ってみて一番感じるのは「住宅の設計は科学的でなければならない。」という持論を實踐して見せた池辺氏の氣迫である。そこには機能主義デザインの将来に危機感をいだいた池辺氏のあくまで機能主義デザインの本筋に沿って前進しようとする悲壯な決意がにじみ出ている。

4. 機能主義デザインの変化について

機能主義デザインが住機能を細分化して行きその細分化された機能に対して限定された空間を割り当てて

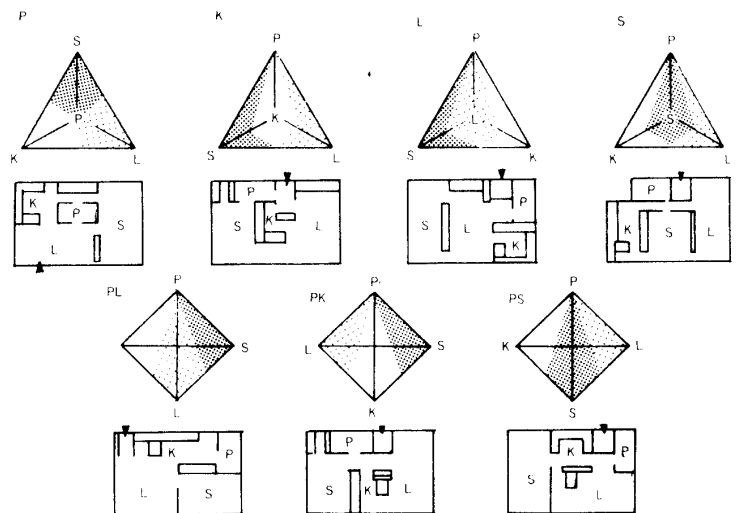


図3

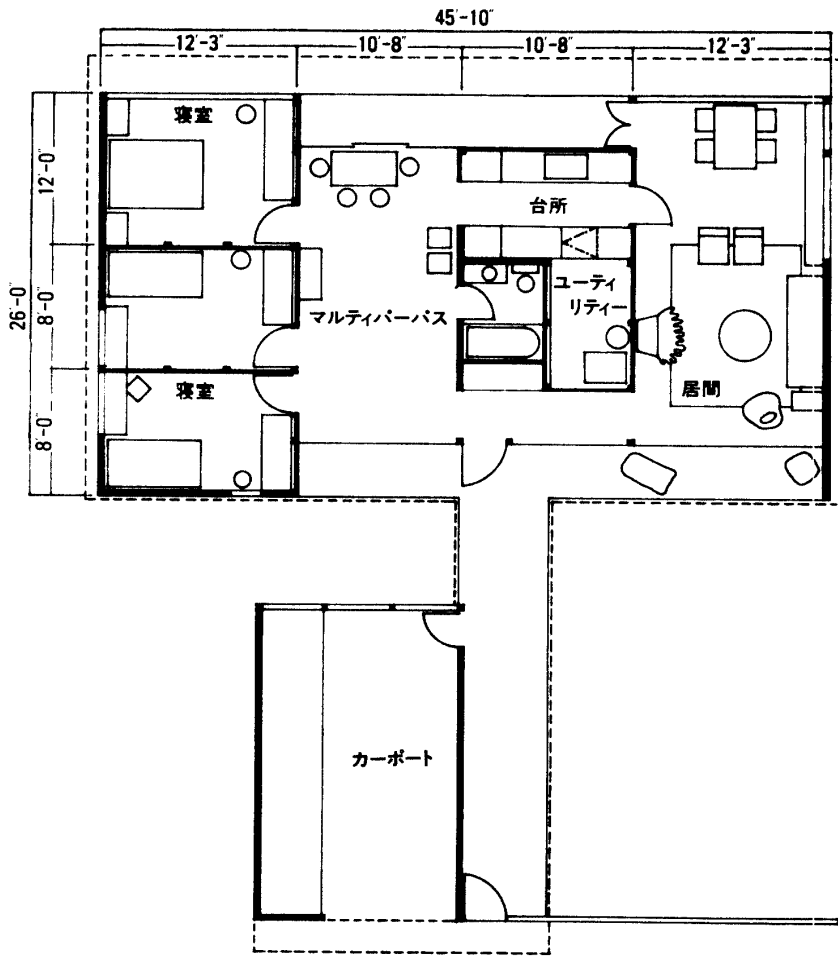


図4

た。人選案はどれも機能主義デザインで健康な感じにあふれるものであったが、マルチパーポスルームとコアシステムを採用したものが多かったのが特色であった。その中でラルフ、ラブソン・案を紹介する。図4このマルチパーポスルームというものはそれまでの日本のデザインにはないものであった。これは子供の遊び場を直接の目的としてそれを家族が自由に散らかしたりして多目的に使うというものであったが、機能主義デザインの硬直化に不安を感じていた若い建築家にとっては驚きでもあり救いでもあった。

行くという方法をとったことからプランが硬直化し身動き出来ないものになって行ったことはたしかである。これに対してプランニングに自由度をもたせそれによってデザインを活性化しようとする動きが出て来た。その一つの表れがマルチパーポスルームである。マルチパーポスルームが我が国に紹介されたのは1951年10月の新建築誌にアメリカの「賞金2000万円の住宅懸賞設計」が発表された時である。この懸賞はアメリカ住宅会社協会（NAHB）と代表的建築誌マガジンオブビルディング（旧名フォーラム）の協同主催で未曾有の賞金2000万円をかけて行われたものであった。課題は1000平方呎（約27坪）を限度とし三寝室の一戸建の小住宅で60呎×100呎の敷地に配置し工費は11000ドル（約400万円）を限度とすることになっていた。当時のアメリカの一般家庭のニーズに答えるものだったのである。これには2727名という応募者があっ

池辺氏もこの考え方を重視し1954年10月に出版された婦人向けの書「すまい」の中で多用室として取り上げ、居間を静かな部分と活動的な部分に分ける考え方を紹介して「居間を二つに分け、活動的な居間として食卓を中心に一つの空間を作る考えがある。これは普通多用室と呼ばれている。これは生活面から考えてたしかによい方法であり、従来の茶の間、座敷の分け方を近代的に組織し直したものといえよう。」⁽⁴⁾と述べている。

機能主義デザインに活路を見出そうとする建築家にとってもう一つの強力な武器になったのがコアシステムの採用であった。コア以外を一つの空間としてフレキシビリティを持たせようとする考え方は機能主義デザインを守りながらプランニングの硬直化から脱出しようとしていた建築家にとっては実に魅力のあるものであった。多くの実例が発表されたのであったが、そ

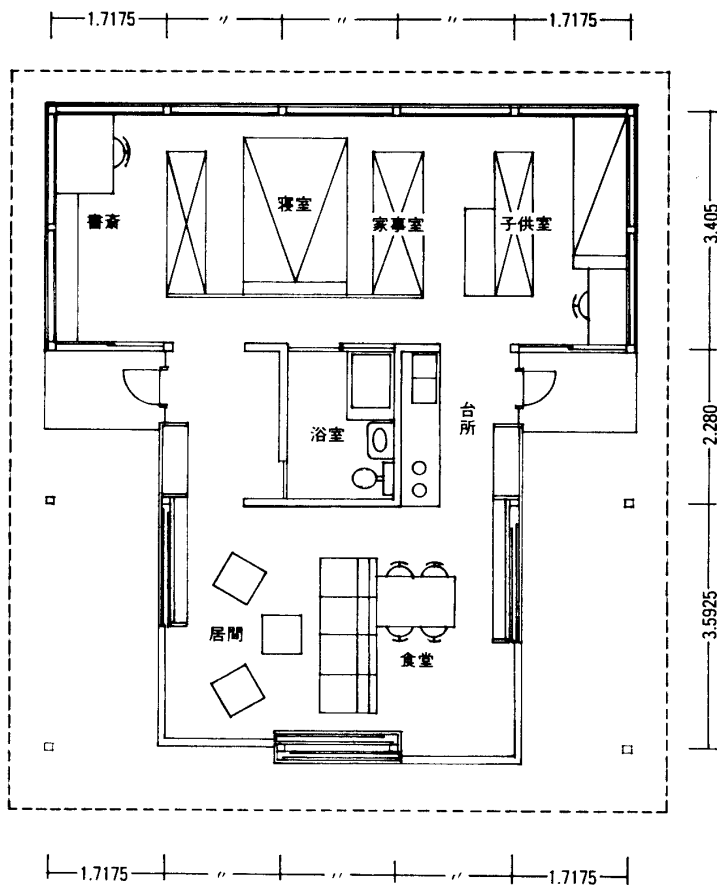


図5

の中で最も注目されたのが1954年11月の新建築に発表された池辺氏の住宅No20であった。図5 この作品は前出の同氏の基本組織図を実際に当てはめた設計になっていて同氏の意欲的な力作であるが、この作品に盛り込まれている考え方は前出の「すまい」の中の同氏の言葉が非常によく表している。

「空間をできるだけまとめて、その間に融通性をもたせよう、という考えは、食事の団欒の場所だけでなく、住居のすべての面について考えられ、進められている。」⁽⁵⁾「このような住居は、前に述べた生活の組織でふれたように、現代の住居は部屋の集まりではなく、生活の場所の組織化である、ということ徹底的に進めたものである。大きな空間の中に、それぞれの生活の場所があり、その間を仕切る壁は全く見当らない。」⁽⁶⁾「組織をよくすることは単に空間の融合を自由にするばかりでなく、面積を節約するのにもっとも大きな影響をもっている。人の

動くための場所、動線の占める面積は住居の中でなかなか大きな部分を占めるからである。」⁽⁷⁾

以上述べた二つの動きはプランニングの硬直化によって自縄自縛の状態になっていた機能主義デザインにとってカンフル注射の役割を果たしたと言える。しかしこれらの考え方を実際の設計に採用した人達の多くは決して機能主義デザインの流れから飛び出してしまうと考えていたわけではなく、これらの動きが機能主義デザインの否定につながるものではなかったことにも注意しなければならない。

5. 清家清氏の主張について

機能主義デザインの行きづまりが見えて来た中で正面からこれに挑戦する動きも出て来た。その一人が清家氏である。清家氏はどのような考え方をしていたのだろうか。これに

ついて見て行きたい。同氏は1952年5月の新建築に「平面について」と題して重要な論文を発表している。この中で同氏は先ず住行為、住機能について表1を挙げている。これを見ると人間が住むための最も現実的なものが挙げられていて清家氏が実用的な機能を考える機能主義を出発点としていることがわかる。同氏は次のようにも述べている。

「戦後の住宅が婦人・児童の解放とともに、住生活の主人公である婦人の生活空間が、住居の裡で質量ともに向上していることは、それが近代主義的であると共に住機能に本質的に合致しているからこのような機能を満足する住宅を機能主義住宅とよんでいる」⁽⁸⁾

つまり同氏は婦人や児童の解放を近代化の方向と見ているのであって、この点では同氏の考え方は西山氏や浜口ミホ氏の考え方と一致している。しかし同氏は又住宅が狭小であることが機能的であることを余儀なくしているのであ

表 1

記号	大別される 行為空間	住機能	住 行 為
B	就寝空間	就 寝 生 殖 保 育 養 老 整 容	就眠・横臥・安静・病臥 性交・分娩・哺乳 教育・就寝・遊戯 保養・就寝 更衣・化粧
L		教 養 社 交 礼 拜 娛 楽 休 息	読書・筆記 接客・談話 礼拝 遊戯・趣味 喫茶・喫煙
D	摂食空間	摂 食	食事・喫茶
K	家事空間	食 事	調理・洗濯・裁縫・格納
S	保健空間	衛 生	沐浴・洗面・排泄

て余裕が出来て来ると反機能的なものが出て来るであろうとも指摘している。最小限であることが機能主義デザインの条件であるとする見方は池辺氏とも一致していて当時の共通的な認識でもあったのだが、一方で清家氏が機能主義デザインの将来に悲観的な予感を持っていたこともよくわかる。清家氏は機能主義を出発点としていながら決してそれに満足していなかったのである。その考え方の経過は次の発言でよくわかる。

「住居の発生的な機能は——《人間の生理的機能の物理的な保護と増進》と考えよ。」⁽⁹⁾と指摘しつつ「好きなことならいくらやっても疲労しない。生理的疲労と心理的疲労は別個の問題である。」⁽¹⁰⁾として「生理学と物理学の上に基盤をもつ機能主義が超克されねばならない」⁽¹¹⁾「これは居住者が無意識の裡に感じている機能主義建築に対するレジスタンスであって、居住者の後進性として建築家が簡単に片づけることのできない問題であろう。」⁽¹²⁾

清家氏は機能主義デザインが心理的なものを取り上げない点にはっきり不満を表明している。これは機能主義デザインにあき足りない人達の気持ちを代表しているとも言えるものであった。そして清家氏は次のように言う。

「機能主義の終点が間近く迫るにつれ乗換えるべき新しい線路は何かという悩みは深い。私は機能主義を超克し得るものとして

機能主義＝物理学＋生理学

であるとするならば、

新しい建築の方向＝物理学＋生理学＋心理学
であると信じる。」⁽¹³⁾

清家氏は機能主義デザインにあき足りないもう一つの理由について次のように述べている。即ち現代のように世の中がめまぐるしく変化するときには生活に恒常性はありません、「機能的にピシヤリと計算されたプランもめまぐるしい世相にあっては数年を出ないうちに使いものにならなくなる。ところが建築を壊してしまうわけにはいかないから使用者は使い勝手の悪い建物だとブスクサ云い乍らその非機能的な建物で生活する。」⁽¹⁴⁾そして清家氏は解決策として「舗設方式の復活を考えている。舗設というのは平安時代にさかのぼるが、当時の住空間設定の方法であって几帳とか、障子とか、そのほか種々な調度で生活空間を建築になじませる方法であった。」⁽¹⁵⁾と舗設方式の提案をしたのである。そして同氏は実際にこの考え方による作品を実現して見せた。

これが1951年9月の新建築に発表された「森博士の家」図6と1953年11月の新建築に発表された「宮城教授の家」図7である。この二つの作品については特に説明する必要はないと思う。清家氏自身の後者の説明の言葉「柱も壁もない平面は、はらわた（ORGAN）をみんなとり出してしまえば完全な一室になってしまうので、そこにORGANを入れることによってFUNCTIONが発生し、ORGANIZATIONが成立する。どなたORGANをどう配置するかによって、そのORGANIZATIONの性能が決定されるわけである。」⁽¹⁶⁾がよく語りつくしている。この二つの作品は機能主義デザインにあき足りなさを感じている建築界に大きなショックを与えた。そして非常に高い評価が与えられた。その中から代表的なものを挙げると、林昌二氏は1954年11月の新建築の「清家清と現代の住居デ

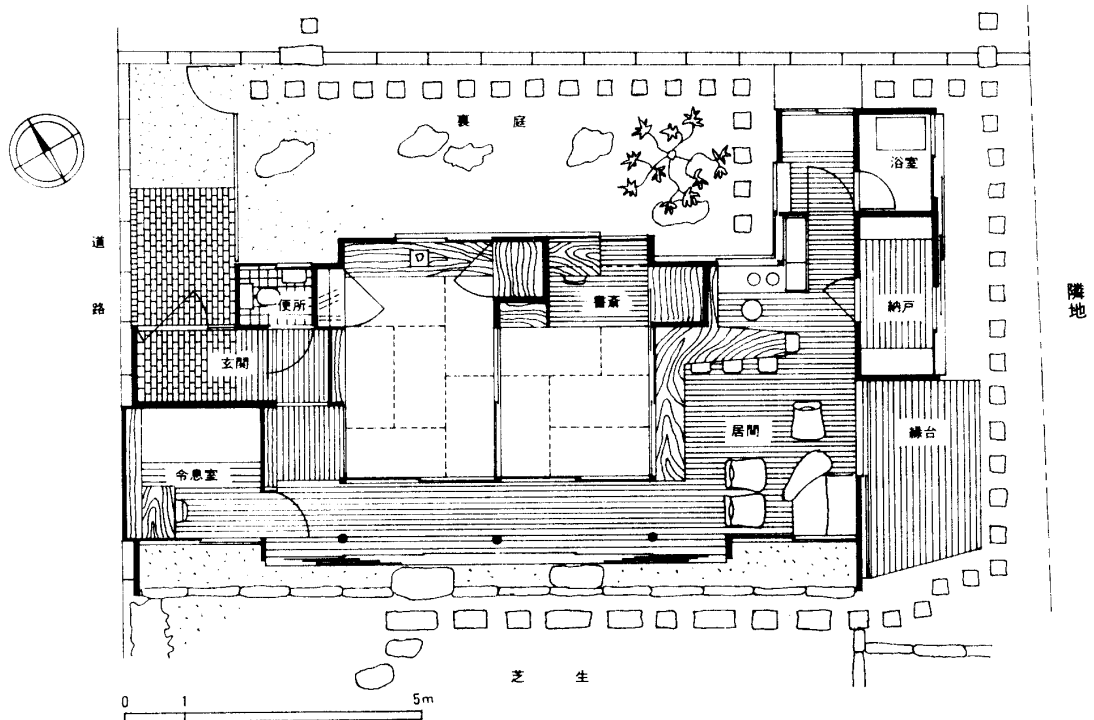


図6

デザイン」の中で「古典のもつていたすぐれた空間構成と近代的な住要求とが総合されて見事な空間が生み出された」と評している。又池辺陽氏も1955年2月の新建築の「『日本的デザイン』といかに取りくむか」の中で「私が彼の作品に注目するのは、西欧的プランニングに対する真正面からの挑戦を感ずるからである。森邸、宮城邸のユニークさを、私はその点からもっとも大きく評価する。彼の試みた問題は、日本の生活様式（タタミという一部の問題ではなく）の伝統を現代の中で生かそう、ということであり、それを西欧のプランニングの観点から見ると、清家の欠陥として指摘されているのではなかろうか。しかし私はこの試みの正しさを思い、彼の勇敢な挑戦、創造への大きな基礎を見る。」⁽¹⁷⁾と機能主義デザインの側からの批判にもふれつつ高く評価している。又丹下健三氏も1955年1月の新建築の「近代建築をいかに理解するか」の中で「日本の伝統的な住居のもつ無限定な空間のなかに近代的生活を包含させようとする試

みが、清家清氏の住居追究の立場であろう、と私は理解し、またそのような追究を高く評価しているのである。」⁽¹⁸⁾と評価している。このようにこの清家氏の試みは停滞を見せ始めた機能主義デザインに対して全く新たな進路を示すものとして激賞されたのであったが、残念ながらその後発展しなかった。1954年11月の新建築に発表された「数学者の家」図8には明らかに後退が見られるのである。これには当然批判がきびしかった。池辺氏は「最近の清家の作品（数学者の家）は私の期待を裏切った。ここに見られるものはあり来りのプランを清家流に粉飾した、と極論してもよいと感じられて非常に残念であった。」⁽¹⁹⁾とやりだまにあげ、丹下氏も「そのごの氏の住宅追究の過程の中に、——限定化への強い傾向が見え始めていることは、限定＝無限定の空間の模索のひとつの過程として理解すべきなのであろうか。」⁽²⁰⁾と疑問を投げかけている。これについて清家氏自身はどう考えているのだろうか。後年1982年に新建築社が

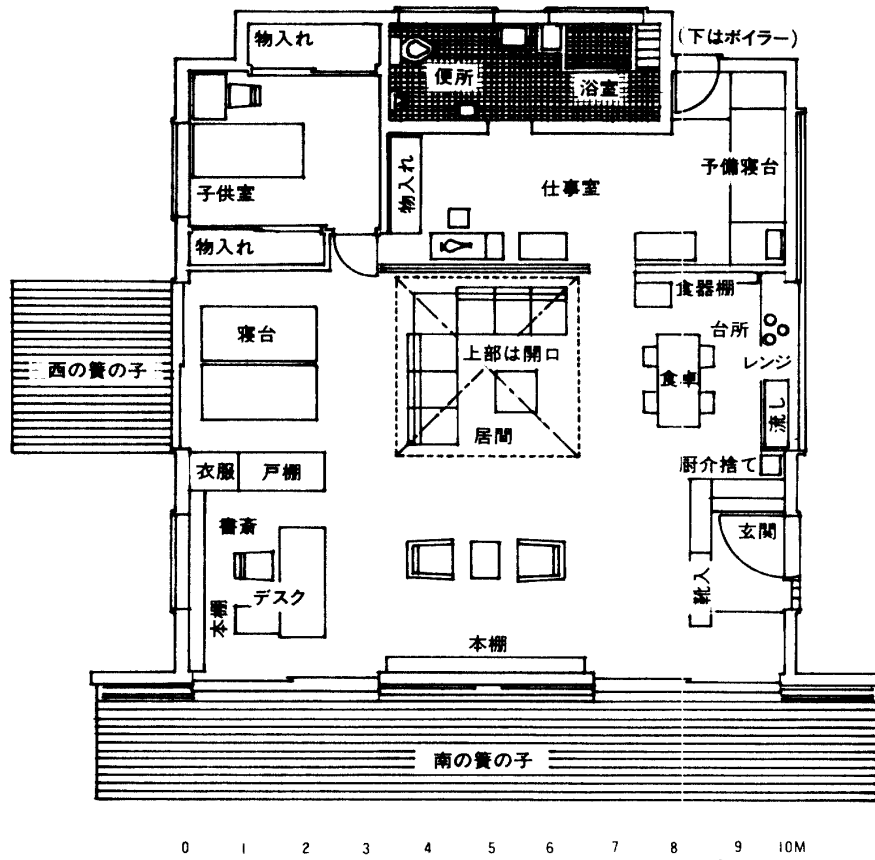


図7

出した清家氏の作品集の中で同氏はこの点について出された質問に答えて次のように語っている。「残念ながらせっかくの舗設のコンヤプトは後退しました。

クライアントの変化です。いわゆるニューファミリー、核家族、さらには親対子、夫対妻などの家族間断絶などエゴイズムの普及に、住宅産業などというコマーシャルイズムが加担、経済成長と相まって舗設は後退せざるを得なかったようです。世は戦国時代に入って、平安朝的な『舗設』の一室空間が、『壁』に囲まれた小室の群雄割拠型になっているようです。平家（ひらや）がなくなったのも一室化が困難になった原因のようです。」⁽²¹⁾ この同氏の言葉は30年近くたって述懐されたものでその後の長い歴史の上に立った見解としてそれなりによく理解出来るのであるが、清家氏の大きな試みが続かなかっ

たことは清家氏自身の性格にも原因があると思われる。この点については林昌二氏が前出の「清家清と現代の住居デザイン」の中で述べている次の言葉がよく表はしている。林氏は清家氏を作家とした上で次のように言っている。「作家清家は、広大な密室の中で豊かな総合判断を行う。けれども彼の徹底的な作家性が、この判断を作品主義に結果させる。作品主義とは、ここで、作家が作品から実験的・過程的意義を払拭して、個々の作品に専ら刹那的完成を強要する傾向を云う。

作品主義は実験主義と対置される。清家が住居デザインにおける作品主義を代表するとすれば、実験主義はたとえば池辺陽によって代表されるであろう。実践主義は、作品の実験的意義を強調して作品の完成を永遠の彼岸に求めざるを得ないが、一方、作品主義は建築の累積性を

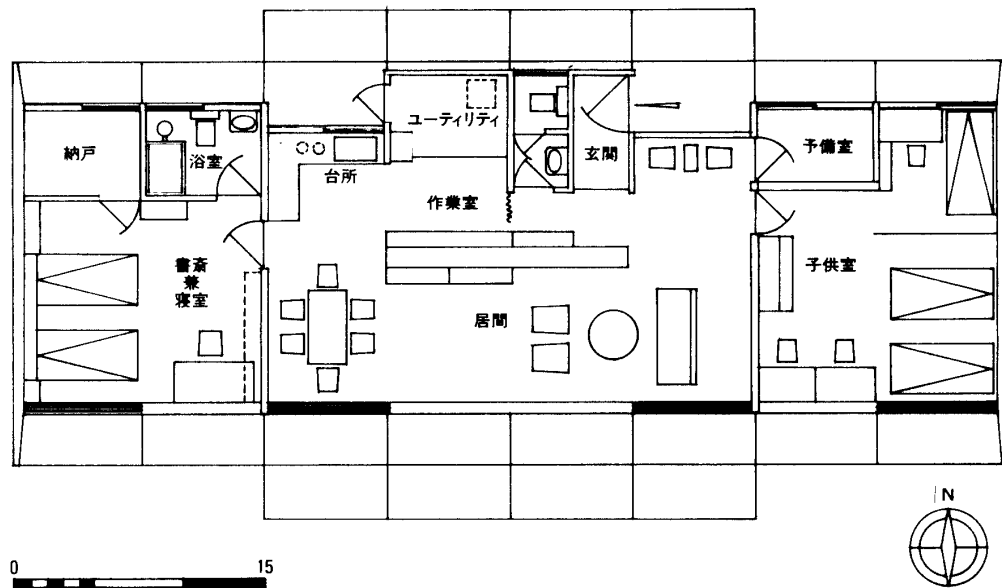


図8

否定して、前進の可能性を放棄させる結果を導く。」⁽²²⁾ この林氏の評は池辺氏に対するものも含めて非常に的確なもので筆者も全く同感である。

清家氏の作品は残念なことに同氏の大きな試みよりも日本の伝統的な技法を応用したたぐいまれな美しさのみがもてはやされ模倣されることになった。そして機能主義デザインの表現にあき足りなくなっていた建築界に新日本調という様式を登場させジャポニカブームを生むことになったのであった。

6. 丹下健三氏の主張について

機能主義デザインに対して批判的な立場からもう一人重要な主張をしているのが丹下健三氏である。丹下氏は1955年1月の新建築に「住居」と題して自邸 図9 を発評すると同時に「現在日本において、近代建築をいかに理解するか—伝統の創造のために—」と題する重要な論文を発表している。その中で丹下氏は先ず機能主義デザインを次のように批判している。

「近代主義の立場からは、生活機能の抽出分

析にその重点がおかれ、そこに想定された機能が生活を規定するところの問題を起点としているのであり、その立場からは、機能はますます分化するものとされ、それに従って、生活空間はますます限定化されようとする傾向にあるが、しかしそこに考えられる生活は、現実の交錯的なすがたの中から、近代主義化の方向だけが抽出されているといえるであろう。」⁽²³⁾

丹下氏は基本的には機能主義を全く否定しているわけではないが、機能主義デザインが日本人の将来の生活のあり方として欧米式の生活のみを近代的なものとして目指した点に問題があったというのである。丹下氏は「現実の生活は、進歩と伝統との抵抗発展として動的である。」⁽²⁴⁾ という。つまり現実には進歩という一面だけでとらえることは出来ないというのである。この考え方は機能主義デザインの一面性への不満を表明したものであるが、丹下氏の考え方には弁証法哲学が色濃く反映していると見られる。

丹下氏は又私的なものと社会的なもの、内部機能と外部機能の関係に着目して次のように述べている。

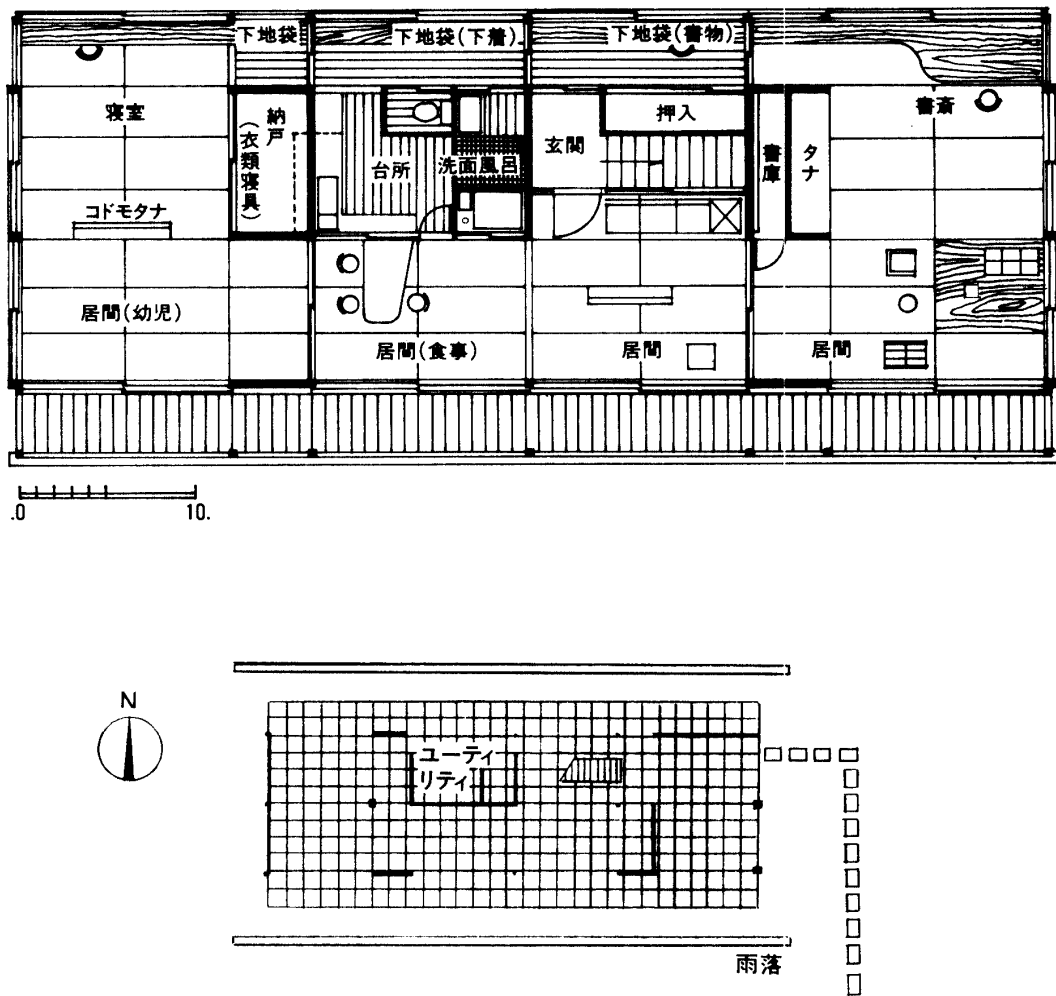


図9

「わたくし達の現実の生活のなかには、また私的＝経済的立場と、社会的立場とが抵抗しつつ交錯しているのである。」⁽²⁵⁾「建築に即して考えてゆくとき、内部機能と外部機能とでも呼ぶたいものを認めないわけにはゆかない。」⁽²⁶⁾

そして内部機能には私的な立場が外部機能には社会的な立場が対応している。その上で「この内部機能だけから建築を組立て、あるいは理解するということは、もはや、ほとんど不可能になっているといってよい。素朴な機能主義の立場は、この内部機能そのもののありのままの表現が建築であると考えていた。わたくしは、むしろこの内部機能と外部機能との接触するところに、建築空間の表現があると考えたいのである。」⁽²⁷⁾と主張している。この主張には住居を個々のものとして考えずに都市的な立

場から考えねばならないとする丹下氏の考え方が強く出て居り、同時に発表された自邸で全面的にピロティーを採用したことがその具体的な提案の一つになっているのである。

次に丹下氏は無限定性と永遠性の必要を主張する。「生活を伝統と進歩との、私的なものと社会的なものとの交錯した抵抗的な発展として、動的に見る立場からすれば、空間における限定性と無限定性、同時性と永遠性の問題に目を向けなければならないであろう。」⁽²⁸⁾

更に丹下氏は機能と空間の間にも弁証法的な関係が存在することを主張する。「『はじめに機能がある』とする見方は、認識として本質的であり、また『はじめに空間がある』とすることは、原始的本能的に根源的である。」⁽²⁹⁾「建築空間と生活機能の対応が、建築創造の課題で

あるといっているのである。わたくしは、建築創造の立場から、この2つの、空間と機能とは、互に対応すべきものでありながら、しかも決して一義的に対応しないものであり、それぞれが独立に、本質的であり、根源的であると考えたのである。そして『はじめに機能がある』立場と、『はじめに空間がある』立場とは、建築創造においてはじめてひとつのものなのである。^[30] 丹下氏は機能主義デザインが空間を一方的（丹下氏はこれを一義的という用語で表しているが）に機能に従属するものとしたことに真っ向から反対し、空間の人間に対する働きも重視しなければならないと主張したのであった。

そして丹下氏は空間が人間に働きかける場合の空間表現としての美についてふれ、「美しさを通じてのみ、建築空間が、機能を人間に伝えることができる^[31]」とし、「このような意味において、『美しさ』もののみ機能的である、といっているのである。^[32]」と注目すべき主張をしている。この主張はやや難解であるが、丹下氏はギリシャの神殿やゴシックの寺院を意識していたと考えられ、そうするとよく理解出来る。又この主張は従来からの「機能的なものは美しい」とする機能主義デザインの主張に真っ向から対抗したものでその後物議をかもしることになった。

最後に丹下氏はこの論文の主たるテーマである伝統の創造についてふれ「近代建築における伝統は、――しばしば逃避的に言われてきたように――その精神にあるのではなく、その表現において、近代的なものと伝統的なものの交錯のなかから、建築家の実践が創造してゆくものであると思うのである。^[33]」と結論している。そして同時に発表された自邸においてその持論を實踐して見せたのであった。以上の丹下氏の主張は弁証法哲学の考え方をういて機能主義の機械論的な決定論的な考え方を正面から批判したもので本格的な芸術論、文明論になって居り、又次の時期の伝統論争の幕あけにもなったのであった。

7. 再び池辺陽氏の主張について

この時期の後半になると機能主義デザインにあき足りなくなった風潮を背景にして、日本の古典建築の技法を近代的デザインの中に取り入れて変化を求める動きが高まって来た。これらの日本的デザインと呼ばれるものは従来からあったいわゆる和風とは全く違ったもので新日本調とも呼ばれた。この一般的な傾向についてどう考えるか、それはこの時期に重要な問題となってきたのである。この問題に対する主張で注目されるのは1955年2月の新建築に発表された池辺陽氏の「『日本的デザイン』といかに取りくむか」という論文である。池辺氏はその中でこの傾向を生んだ理由を世界的な背景の中に求めて次のように述べている。

「第1に、考えられるのは、いわゆる近代建築の行き詰りと新たな展開である。1920年代から30年代にかけての機能主義・合理主義を主軸とする近代建築の発展がその限界に達し、新たな展開を求めていることは周知の事実であり、北欧を始めとして各国に戦前には見られなかった傾向が強まった。人間的なものの建築的把握である。この世界的傾向が私たちに従来デザインに対する大きな反省を与えていること、これが第一の原因といえよう。^[34]」

当時海外で新しいデザインを求める方向の一つとして日本の古典に強い関心を持たれ、その技法でデザインの中にどんどん取り入れられていた。この海外の傾向が我が国に逆輸入されて日本調の流行に拍車をかけたのも事実である。この点について池辺氏は次のように述べている。

「第2に、この人間的なものの建築的把握の傾向が、世界の建築家に日本の古典建築が大きくアピールしたことである。日本の古典建築が、その単純さ、合理性、無装飾性、開放性などの一連の近代建築表現に大きな類似性を持っていたのに加えて、それには更に自然との結びつきや、人間的な柔かさ、などの近代建築、西欧建築にかけていた多くのユニークな性質を保持していた。この点が近代建築の新たな展開に大きな影響を与え、日本的な表現がどんどん取

り入れられた。この傾向が日本人を強く刺激し、日本の中での日本的なデザインの再認識が始められる原因となった。」⁽³⁵⁾

しかし注意しなければならないのは同じ日本のデザインでもそれが欧米人に対するのと日本人に対するのでは質的に全く異っていることである。欧米人が日本の古典に新鮮さを感じて取り入れたとしてもそれによって生活自体が大きな影響を受けることは考えられない。ところが日本人にとっては古典の様式は古い生活と密接に結びついて居り、これを無批判に取り入れることは生活の近代化にブレーキをかけることになる。この点については池辺氏も従来から指摘していた。

「日本建物のディテールの為の多くの特質、障子、タタミ等のすぐれた性質と美しさについては、ややもするとひかれがちである。しかし一方に私たちはそれらのものが、現在までの原始的な生活設備と封建的な平面と、手工業生産等から切り離して存在してきたものではないことを知っている。それ故に私たちが日本的ディテールを取り上げる場合に、それと共に私たちが日本建物の中で否定しようとしているものが何時の間にか忍び込むのを防ぐことは非常に困難である。」⁽³⁶⁾

日本的デザインの流行現象について池辺氏は日本の古典建築が近代性を持っているが故に戦前から近代建築を目指す建築家達の逃げ場の役目を果して来て居り、又それが同じように始まったのだと指摘している。

「再び建築家の逃避が始まったのである。しかもそれは戦前よりはるかに強く、世界的基盤を持ったものであった。それは世界の近代建築の行き詰りにふれているだけに、その優位性は絶対であった。」⁽³⁷⁾「これならできる、という安心感をもって、多くの建築家はそれに飛びつき古典建築の中にネタ探しが始まったのである。」⁽³⁸⁾「このような日本的デザインの傾向、それは建築家の自殺行為以外の何ものでもない。私はこの傾向に対しては全面的に否定すべきであると考える。」⁽³⁹⁾

池辺氏の批判はかなり激しいものであるが、これは機能主義デザインの行き詰まりに対して清家氏や丹下氏の試みも発展を見せず、底の浅い新日本調の流行だけだ滔々と流れて行く状況に対する同氏の焦燥感がよく表れていて筆者にもよく理解出来る。

機能主義デザインの行き詰りに対してそれが何故であるか根本にまで掘り下げて論じたものはあまり見られなかったのであるが、その中で最も注意されるのが1955年8月の建築文化に発表された池辺氏の「建築創造のリアリティをどこに求めるか？」という論文である。この中で池辺氏は次のように述べている。

「近代建築の発展のうちで、もっとも重要な役割を果たしたイデーは機能主義であった。しかし現在その基底がゆれ動いている。なぜこのようなことが起ったのだろうか。私は多くの論者がいうように、その原因が機能主義の誤りにあったのではないと考えている。人間が機能だけに満足できずに造形を求めているのだ、という俗論にくみするものではない。」⁽⁴⁰⁾

「それは機能主義のイデーそのものにあるというよりは、それを支える基盤の変化である。かつて機能主義を必然的に支えていた基盤がすでに崩壊している。したがって機能主義のデザインはそのリアリティを失ってしまったと考えられる。」⁽⁴¹⁾

機能主義は筆者も前述したように近代工業のイデオロギーであり機能文明のイデオロギーである。機能主義が高らかにかけられた時には近代工業と機械文明が人間に幸福をもたらすという確信があった。しかしその確信にゆらぎが生じた。池辺氏は次のように指摘する。

「多くの人間を幸福にするための工業は、単にその経営者の富を増すだけに役立つ、機能主義建築の追究は、人間を巨大な機構の部分に追い込む結果を生んだ。労働者住宅の改善を目標とした住宅建築の新しい方法は、より大きく金持ちの人かちの住宅を近代化するために役立つてしまった。」⁽⁴²⁾「こうして機能主義は近代資本主義の発展のなかで、いつしかその人間性から

離れ、リアリティを失い、形骸化の道を歩んだ。」⁽⁴³⁾

建築創造のリアリティを機能主義に求めることができないとなると一体どこに求めるのか、問題提起をした池辺氏自身はどう考えていたのだろうか。同氏は1955年11月の新建築に発展した「快樂主義への傾斜とたたかう一住いという芸術の本質—」の中で次のように述べている。

「住居は生きるためのものでなければならず、それに何等のものを付け加える必要はない。問題は生きるとは何かということ掘り下げることがあり、住居デザインの追究にとってこのことより外に、何らの言葉を要しないのである。」⁽⁴⁴⁾ これは一般に行われている「生きるためだけの住居は本当の人間の住居ではない、住居が本当に人間のものになるためには何等かのものが加えられなければならない。それが美であり芸術である」という説に真っ向から反対したので、池辺氏によれば建築が真の造型芸術となるためにはその造形が人間の生きる目的そのものから出て来るのでなければならず、それに付加されたものであるならばその造形は単なるアクセサリーに過ぎず決して真の芸術とはなり得ないというのである。そして前者の例としてゴシックを挙げ後者の例としてローマやロココを挙げている。

そして池辺氏は現代に於ては人間の一人一人が創造的な人間性をもつことが必要であると主張し、デザインのリアリティもいかにしたら創造的な人間の形成に役立つかという点に求められなければならないと強調している。池辺氏は従来から住居は建築家が完成するものではなく居住者が完成し発展させてゆくものであるという考えをもって居り、居住者に安住の地を与えるのではなく池辺氏自身の主張を投げかけて居住者がそれに反応し更に新しいものを求めて前進することを期待するという立場をとっている。このことは「デザインがそれを使う人に、なんらかの形の問題を提供すること、その人の心や生活になんらかの変化を及ぼさないものであったら、建築は芸術ではない。」⁽⁴⁵⁾ という言葉によ

く表されている。この池辺氏の芸術観は最も正当なものであると思う。これは当時の居住デザインが居住者に快感を与えることのみを目的としたものが多くなって来た傾向を憂慮し、そのようなものは何等芸術とは無関係であることを強調したのであった。そして又近代工業が人間に物質的繁栄を与えた反面、巨大な機構の中へ人間を埋没させて行きつつある状況に対し、それに抵抗することに活路を見出そうとする気持ちがよく表れている。

III まとめ

1950年代前半の新しい住居デザインを模索する動きを見て来た。今からふり返って見ると当時の指導的な建築家達が日本の大衆の新しい住居を創造するために苦しみ悩みつつも情熱を傾けて取り組んだ様子がよくわかる。実際には今回取り上げたものの他にもローコストと取り組んだRIAの仕事、鉄骨住宅と取り組んだ広瀬鎌二氏の仕事、すぐれた作品を生んだ増沢洵氏の仕事など貴重な業績があるが省略せざるを得なかった。

この時期の動きは一口に言えば機能主義デザインの見直しということにつきる。機能主義デザインは前の時期に続いて住居デザインの主流になっており、引続き多くの若い建築家によって実施に移され大衆の間に確実に浸透し根を下して行った。この時期に於ても機能主義デザインの果たした役割は大きかったのである。にもかかわらず同時に一方で将来に向けて行き詰りの傾向も見えてきたために、前衛的な建築家の間では見直そうとする動きが活発になって来たのである。特に清家氏と丹下氏は機能主義デザインに根本的に疑問を投げかけて新しい方向を求めようとしたのであった。清家氏は心理的なものの重視と鋪設方式を提案し丹下氏は伝統の重視と無限定空間の提案をした。この両氏の主張は相当説得力があり機能主義デザインにあき足りなさを感じていた建築家達の心をとらえた。

しかしながら戦後初期の日本の住居デザイン

で機能主義が至上のものとして採られたのは日本の大衆に近代的な住居を与えなければならぬという社会的な要請がありそれにこたえるには機能主義の科学性、合理性、客観性が不可欠だったからであり、又当時の建築家達にもこれにこたえる社会性が強かったからであるが、これに対して住居デザインの新しい方向が心理的なものや伝統を重視するとすればどうしても主観的な傾向が強くならざるを得ず、それが真に当時の社会的要請に合致するものであったかどうか、社会性の低下ではなかったか、疑問なしとしないが、事実は徐々にその方向へ向って行ったのであった。

引用文献

- (1) ①池辺陽 ②新建築 ③Vol.28 1953年11月 ④14P
- (2) 同上
- (3) ①②同上 ③Vol.28 1953年1月 ④45P
- (4) ①同上 ②すまい ③岩波婦人行叢書 ④1954年10月 ⑤55P
- (5)(6) ①②③④同上 ⑤199P
- (7) ①②③④同上 ⑤201P, 202P
- (8) ①清家清 ②新建築 ③Vol.27 1952年5月 ④47P
- (9)(10)(11)(12)(13) ①②③同上 ④48P
- (14)(15) ①②③同上 ④49P
- (16) ①②同上 ③Vol.28 1953年11月 ④25P
- (17) ①池辺陽 ②新建築 ③Vol.30 1955年2月 ④43P
- (18) ①丹下健三 ②新建築 ③Vol.30 1955年1月 ④16P
- (19) (17)に同じ
- (20) (18)に同じ
- (21) ①清家清 ②日本現代建築家シリーズ5 ③新建築社 ④1982年10月 ⑤11P
- (22) ①林昌二 ②新建築 ③Vol.29 1954年11月 ④7P
- (23) ①丹下健三 ②新建築 ③Vol.30 1955年1月 ④15P

- (24) 同上
- (25)(26)(27)(28)(29)(30) ①②③同上 ④16P
- (31)(32)(33) ①②③同上 ④18P
- (34)(35) ①池辺陽 ②新建築 ③Vol.30 1955年2月 ④41P
- (36) ①②同上 ③Vol.28 1953年11月 ④14P
- (37)(38)(39) ①②同上 ③Vol.30 1955年2月 ④42P
- (40)(41)(42) ①同上 ②建築文化 ③1955年8月 ④47P
- (43) ①②③同上 ④48P
- (44) ①同上 ②新建築 ③Vol.30 1955年11月 ④11P
- (45) ①同上 ②建築文化 ③1955年8月 ④51P

図版出典

- 図1, 図2, 図3 ①池辺陽 ②新建築 ③Vol.28 1953年11月 ④46P
- 図4 ①ラルフ・ラブソン ②新建築 ③Vol.26 1951年10月 ④26P
- 図5 ①池辺陽 ②新建築 ③Vol.29 1954年11月 ④47P
- 図6 ①清家清 ②新建築 ③Vol.26 1951年9月 ④22P
- 図7 ①②同上 ③Vol.28 1953年11月 ④25P
- 図8 ①②同上 ③Vol.29 1954年11月 ④13P
- 図9 ①丹下健三 ②新建築 ③Vol.30 1955年1月 ④22P, 23P
- 表1 ①清家清 ②新建築 ③Vol.27 1952年5月 ④45P